王朝女性の精神的やすらぎ

平安時代は、一面、王朝文化の華やかさを、誇っている。しかし、その裏には、多くの確執がある。それは、天皇と外戚関係を、持つことによって、高い位に、のぼろうとする貴族達の、争いであった。菅原道真が、退けられて以後は、藤原家（特に北家）の、全盛時代である。貴族は、自分の娘を皇后や中宮に、立たせようとして、一芸に秀でた、多くの女性を、女房として、召しかかえた。その中に、清少納言や紫式部等、歴史に、文名を駆せた才女も、いた。掌中に、権力を　にぎろうとして、日夜、努力する男性に　比して、女性の生きがいは、すくない。彼女達の興味は、和歌や物語にむけられ、日常生活では、訪れてくる男性を　待つ日々で、あった。多くの女性が、経済的に、自立していないので、男性に、去られ、又、仕えるべき人と、はなれた時の、悲惨さは、ひとしおである。清少納言の、零落が、『古事談』に、えがかれているが、中の関白家の失退を、考えあわせると、実話か否かは、ともかくとして、その間の事情が、想像できる。又、物語ではあるが、光源氏の、須磨退去あとの、末摘花の窮乏生活も、十分、女性の立場を、語っている。

そのような、不安定な立場に、おかれている、彼女達は、何を、よりどころとし、何に、精神的なやすらぎを、見い出して、いったのであろうか。以下、兼家との、不安定な愛に、心を、揺れ動かした道綱母、為尊・敦道両親王への愛に、悩んだ和泉式部。物語のような世界を、夢みつつ、ついに果し得なかった、孝標女、別々の生き方をした、三人を、とりあげて、この問題を、考えてみよう。